

大聖院：弥勒の間

大聖院の観音堂の中にある弥勒の間は、弥勒菩薩に捧げられた部屋です。仏教の經典では、弥勒菩薩とは何千年も先の未来、歴史的人物のブツダの後継者として地上に現れる者として描かれています。弥勒菩薩の崇拜は特にチベット仏教で一般的であり、大聖院に弥勒の間が設けられている理由は、大聖院の持つチベットとのつながりにあります。大聖院が属する密教の真言宗は、チベット仏教と共通した教義の要素や歴史的な由来を持っています。どちらも密教の伝統から派生したこの2つの宗教は、今日でも一定の交流を維持しています。

この友好関係により、2006年、伝承に謳われる真言宗の開祖・空海（774～835）による開基から1200年の節目を祝うため、ダライ・ラマ法王が大聖院を訪れました。この時ダライ・ラマ法王が奉獻した金の弥勒菩薩像は、現在は弥勒の間に展示され、色鮮やかなチベットの吹き流しで飾られています。この像の前には、密教の核となる信念を極彩色で表した砂曼荼羅があります。この砂曼荼羅は、2006年にダライ・ラマ法王に随行した仏僧によって描かれたものです。

弥勒の間はこの重大な訪問を記念しているだけの場所ではありません。毎月8日には日本に住むチベットの仏僧が大聖院を訪れ、この部屋で式典を行っています。